

学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名

長崎県

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	厳原町立久田中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	2	1		4	12
生徒数	34	46	38		118	

II 研究の概要

1. 研究主題

「一人ひとりの確かな学力の向上をめざして」
～個に応じた指導方法・指導体制の工夫を通して～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・数学	第1学年においては、生徒たちの理解度に差が出やすく、第2、3学年においては、既に学力差が大きく、苦手教科とする生徒が多いため。
全学年・英語	中学校から初めて学習する教科であり、戸惑いから苦手とする生徒が多く、また、普段コミュニケーション能力向上の学習が中心で、「書くこと」を苦手とする生徒が多いため
全学年・理科	十分な観察や実験の時間を与え、生徒一人ひとりに細かな指導をすることで、実験や観察の基礎基本を身につけさせるため。生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	○ テーマ
	<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善と教材の開発 ・生徒の学力の評価を生かした指導の改善
	○ 仮説
	<ul style="list-style-type: none"> ・厳選された学習内容を、T・T指導、少人数指導、また繰り返し指導や習熟度別指導などの個に応じたきめ細かな指導や、個に応じた教材の開発をし、それを生かして指導する。それにより、習熟度が低い生徒に基礎・基本を確実に定着させることができるとともに、習熟度が高い生徒にも、より発展的な学習に取り組みさせることができる。このような生徒一人ひとりの要求に応じた指導行っていけば、確かな学力の向上につながる。 ・学習指導要領に示される目標に照らした評価（絶対評価）を用いることは、生徒の習熟度を客観的に判断することができるだけでなく、その結果を指導の中に生かして、生徒の要求に応える指導が可能となる。また、そのことが生徒の学習意欲にもつながり、確かな学力を向上させるには有用である。

○ 研究の内容・方法

① T・T指導・・・数学科，英語科，理科で実施

<数学科>

- ・第1学年1組，2組，第3学年・・・・・・・・・・・・・・・・各週3時間
- ・第1学年1組，2組 T2は免外教員，第3学年は数学科教員

<英語科>

- ・第1学年1組，2組，第2学年，第3学年・・・・・・・・各週1時間
- ・T2は免外教員

<理科>

- ・第1学年1組，2組，第2学年，第3学年・・・・・・・・各週1時間
- ・T2は免許保持教員

- ◇評価は教科担任が行う。
- ◇教科担任と補助教員は，TT授業の前後に授業内容についての打ち合わせをもつ。
- ◇授業日については，学習内容と照らし合わせて変更することも考えられる。

② 少人数指導（習熟度別指導）：数学科で実施

- ◇第2学年・・・・週3時間

◇コース編制

- ・单元ごとに習熟度別にコース（基礎充実，基礎発展の2コース）を編制する。生徒の希望を優先してコースを編制する。
- ・コース編制後しばらくは，コース変更も認める。

- ◇指導教員・・・・数学科教員2名

单元ごとにコースを入れ替わり，全体の学力等の把握を図る。

- ◇評価・・・・テストは共通の問題を実施する。

学期末評価は教科部会にて行う

- ◇その他・・・・指導内容は基本的に両コースとも同じものとする。

ただし，基礎充実コースは演習問題等を多く取り入れる。

③ 朝自習における読書の実施

- ◇生徒自身による本の選択

- ◇月2回，モーニング読書として一斉読書の実施

（教員による朗読，専門部による読書感想の実施）

- 全 体・・・・毎月1回（火曜日）全体研修を実施

- ・研究の進め方などについて共通理解を図る
- ・研究を深めるための学習会等を実施

- 各教科・・・・ねらいに応じた指導を検討し，実施する

- ・研究授業の実施
- ・評価規準の作成

平成
15
年度

○ テーマ

- ・個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善と教材の開発
- ・生徒の学力の評価を生かした指導の改善
- ・自ら学ぶ力を身につけさせる工夫

- 仮説
 - ・厳選された学習内容を、T・T指導、少人数指導、また繰り返し指導や習熟度別指導などの個に応じたきめ細かな指導や、個に応じた教材の開発をし、それを生かして指導する。それにより、習熟度が低い生徒に基礎・基本を確実に定着させることができるとともに、習熟度が高い生徒にも、より発展的な学習に取り組ませることができる。このような生徒一人ひとりの要求に応じた指導を行っていけば、確実な学力の向上につながる。
 - ・生徒の習熟度を客観的に評価（絶対評価）し、その結果を指導の中に生かすことで、生徒の要求に応える指導が可能となり、そのことが生徒の学習意欲を高め、確かな学力の向上につながる。

○ 研究の内容・方法

(1) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

① T・T指導・・・数学科、英語科、理科で実施

<数学科>

- ・第1学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・週3時間
- ・第2学年（習熟度別指導の基礎充実コース）・・・・・・・・週3時間
- ・T2は免外教員

<英語科>

- ・第1学年，第2学年1組，2組，第3学年・・・・・・・・各週1時間
- ・T2は免外教員

<理科>

- ・第1学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・週3時間
- ・第2学年1組，2組・・・・・・・・・・・・・・・・週1時間
- ・第3学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・週2時間
- ・T2は免許保持教員

◇評価は教科担任が行う。

◇教科担任と補助教員は、TT授業の前後に授業内容についての打ち合わせをもつ。

◇授業日については、学習内容と照らし合わせて変更することも考えられる。

② 習熟度別指導（少人数指導）：数学科（選択数学も含む）で実施

◇第2学年，第3学年・・・・・・・・・・・・・・・・各週3時間

◇コース編制

- ・单元ごとに習熟度別にコース（基礎充実，基礎発展の2コース）を編制する。生徒の希望を優先してコースを編制する。
- ・第2学年は2学級を2コースに，第3学年は1学級を2コースに編制（少人数指導）する。
- ・コース編制後しばらくは，コース変更も認める。

◇指導教員・・・数学科教員2名（2年充実コースはT・T指導）

单元ごとにコースを入れ替わり，全体の学力等の把握を図る。

◇評価・・・・・・・・テストは共通の問題を実施する。

学期末評価は教科部会にて行う。

◇その他・・・・・・・・指導内容は基本的に両コースとも同じものとする。

ただし，基礎充実コースは演習問題等を多く取り入れる。

③ 繰り返し指導，個別指導

◇5分間小テストと個別指導

◇短学活を利用した繰り返し学習

(2) 個に応じた指導のための教材の開発

① 生徒の習熟度や個に応じたきめ細かな指導のための教材の開発

◇補足的・発展的な学習のための教材開発を行う。

② 基礎・基本の確実な定着のための繰り返し学習の教材の開発

◇興味・関心をもって、意欲的に取り組める繰り返し教材の開発を行う。

(3) 生徒の学力の評価を生かした指導の改善

① 絶対評価・評価規準に関する研修

◇全体研修会で研修を深めたり、研修会等に積極的に参加し、得たものをお互いに共有しあう。

② 評価を生かした指導の充実

(4) 自ら学ぶ力を身につけさせる工夫

① 朝読書の実施

◇集中力と読解力を高めるために、毎朝8時15分～8時30分の15分間実施する。

② 久田中検定（15年度からの取り組み）

◇「読み・書き・計算」の力と学習意欲の向上をめざして、全校一斉に本校独自の検定を実施する。

◇教科・・・国語・数学・英語

◇1ヶ月に1教科を割り当て、月末に検定試験を行う。

※本校生徒は与えられた課題には取り組むが、自主的に学習に取り組む生徒が少ないという実態があった。そこで、生徒自身に目標を持たせ、努力した結果が成果として表れるような取組により、学習意欲の向上を図れるのではないかと考えた。

また繰り返し学習により、すべての学習の基本となる「読み・書き・計算」の力を高めることを目的としている。

③ 各種公認検定の実施

◇英検・漢検を実施する。（希望者のみ）

平成
16
年度

○ テーマ

- ・個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善と教材の開発
- ・生徒の学力の評価を生かした指導の改善
- ・自ら学ぶ力を身につけさせる工夫
- ・家庭との連携のもと学力向上につながる基本的な生活習慣の確立と家庭学習の定着の推進

○ 仮説

- ・厳選された学習内容を、T・T指導、少人数指導、また繰り返し指導や習熟度別指導などの個に応じたきめ細かな指導や、個に応じた教材の開発をし、それを生かして指導する。それにより、習熟度が低い生徒に基礎・基本を確実に定着させることができるとともに、習熟度が高い生徒にも、より発展的な学習に取り組ませることができる。このような生徒一人ひとりの要求に応じた指導を行っていけば、確実な学力の向上につながる。
- ・生徒の習熟度を客観的に評価（絶対評価）し、その結果を指導の中に生かすことで、生徒の要求に応える指導が可能となり、そのことが生徒の学習意欲を高め、確かな学力の向上につながる。また生徒に具体的な学習の目標を与え、目標ごとの自己評価や単元全体の自己評価をさせることで自己分析する力や自ら学ぼうとする力等の自己学習能力の育成につながる。

- ・生徒の学習に対する意識調査や生活実態調査を実施・分析し、それを教科指導や生活指導に生かすことにより、より効果的な学力の向上が図られる。また家庭と連携し、理解と協力を得ることで、効果的に教育活動が推進できると考える。

○ 研究の内容・方法

(1) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

- ① 習熟度別指導（少人数指導）
- ② T・T指導
- ③ 選択教科における指導体制の工夫
- ④ 繰り返し指導，個別指導

(2) 個に応じた指導のための教材の開発

- ① 生徒の習熟度や個に応じたきめ細かな指導のための教材の開発
- ② 基礎・基本の確実な定着を図る繰り返し学習の教材の開発

(3) 生徒の学力の評価を生かした指導の改善

- ① 絶対評価・個人内評価・評価規準に関する研修
- ② 評価を生かした指導の充実
- ③ 自己評価力を育成するための取組

(4) 学習意欲・学力向上に向けた全校的な取組

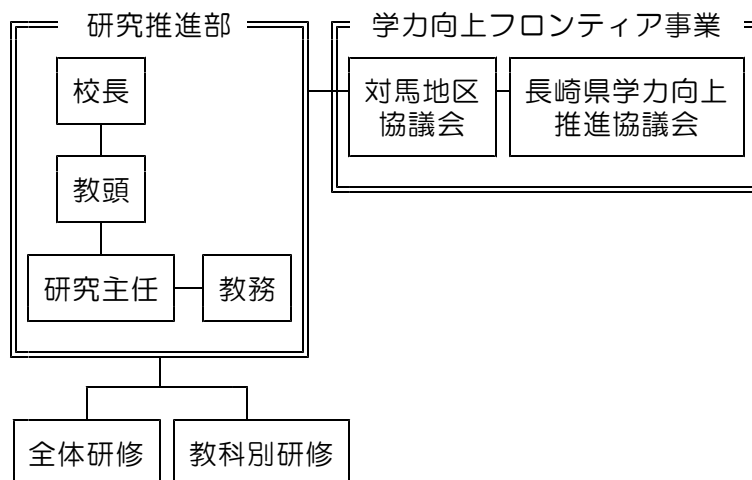
- ① 朝読書の充実
- ② 久田中検定の実施
- ③ 各種公認検定の実施
- ④ 家庭学習の定着

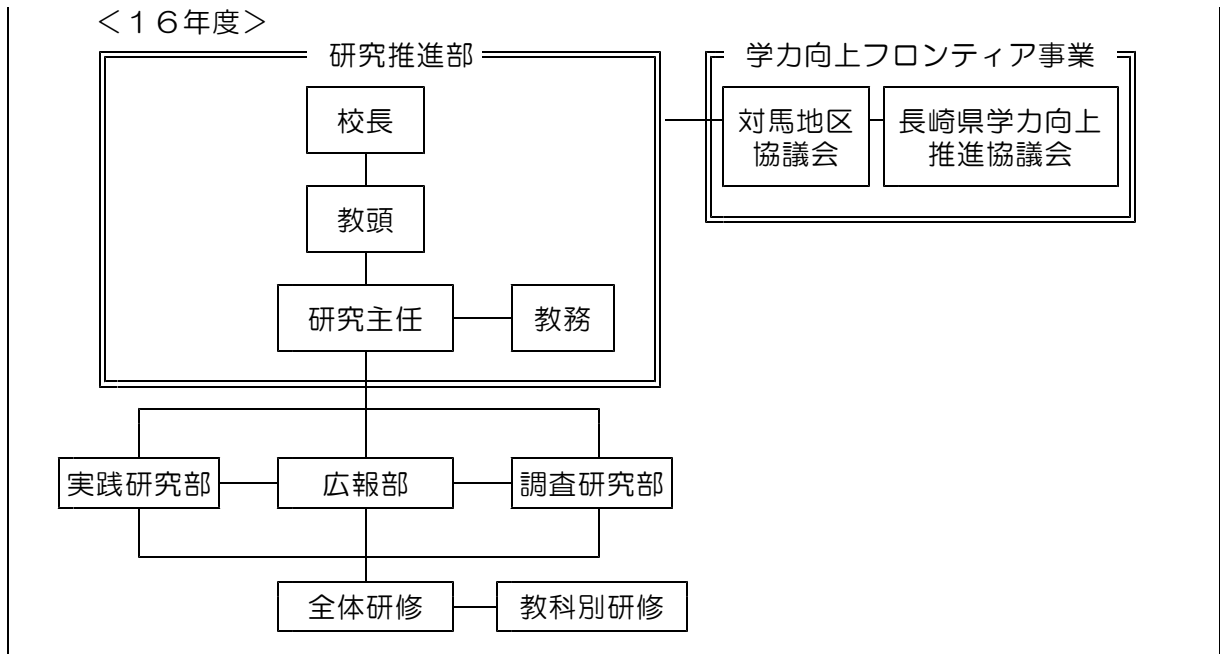
(5) 家庭・地域との連携

- ① 調査の実施・分析（1回目は15年度3学期中に実施）
- ② 家庭への情報の公開（広報誌の発行）
- ③ 地域への情報の発信（ホームページの更新）
- ④ 研究の検証や診断

(3) 研究推進体制

<14・15年度>



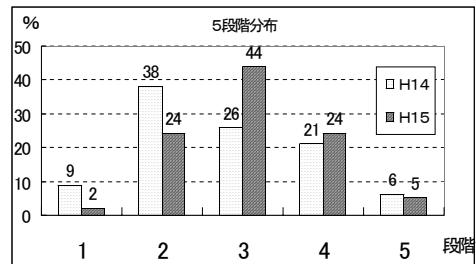


Ⅲ 平成15年度の研究の成果及び今後の課題
1. 研究の成果

① T・T指導

<数学科>

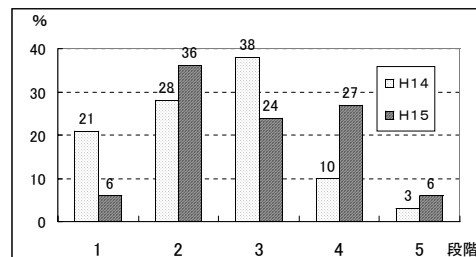
- 指導者が2人になったことで、支援が必要と思われる生徒への対応の機会が増えた。
- 1人の指導者では見つけられなかった生徒のつまずきや理解の状況を2人で指導することでより多く見ることができた。また授業後にそれらを出し合うことにより、そのことを次の授業に生かし、指導することができた。
- 机間指導を2人で行うため、生徒からの質問も多くなり、学習活動が活性化した。
- 2年生は昨年度から継続してT・T指導を行っている。昨年度と本年度行った業者テストの結果を比較してみると、1, 2段階の生徒が2, 3段階に移行してきた。



<英語科>

- 指導者が2人になったことで、支援が必要と思われる生徒への対応の機会が増えた。
- T2が主に採点を受け持つため、T1がじっくりと生徒一人ひとりに指導する機会が増えた。
- TK式学力テストを、現在の3年生を対象に昨年度と今年度実施し、書く領域のデータを比較したところ以下のような結果が表れ、英語を書くことの力の向上が見られる。

	達成率	全国達成率	全国比
H14	31.2	41.0	76
H15	42.6	46.0	93



<理科>

○実験・観察では、各班の指導に十分な時間をかけることができるため、目的や内容をしっかり理解して取り組む生徒が増えた。また、実験器具を正しく使えない生徒に対しても、個別指導が十分できるため、けがや事故の防止にもなっている。

○実験・観察以外の授業では、一斉授業の中で個に応じた指導が十分できなかったが、2人で机間指導を行うことで、基礎・基本が定着していない生徒を中心に理解を高めることができた。

② 習熟度別指導（少人数指導）

○基礎充実コースでは基本的な問題を繰り返し行い、発展コースでは難易度の高い問題にも取り組ませ、生徒の習熟度に応じた指導ができた。

○それぞれの習熟度に応じた活動場面を設定したことや、少人数で学習していることにより、挙手や発言が多くなるなど積極的に授業に参加できるようになった生徒が多い。

○特に基礎充実コースの生徒にとっては自分の力に合ったペースでじっくり学習に取り組むことができる。

○3年生においては1学級37名を2コースにしていることから、教室のスペースや精神的なゆとりが感じられる。

○3年生では、コースの希望をとる際に以前は習熟度の高い生徒でも基礎充実コースを希望する生徒が多かったが、徐々に自分の力に応じたコース選択ができるようになり、生徒の学習に対する意識の向上と自己評価力が身に付いてきている。

○2年生の基礎充実コースではT・T指導を行うことにより、習熟度の低い生徒に個別指導の機会を多くとることができた。

③ 繰り返し指導、個別指導

○5分間小テストと個別指導について授業始め、主に前時の内容についての5分間程度の小テストを繰り返し行った。自己採点をさせ、その結果により授業外の時間を利用し、個別指導や再テストを行い、定着を図った。

<事例>

小テストの結果

1-(1)	1-(2)	2-(1)	2-(2)	2-(3)	3-(1)	3-(2)
5/10	4/10	1/4	0/4	1/4	2/6	3/6

(正解数/問題数)

↓

毎回放課後、個別指導や再テストを行った。また途中の式を省略してミスをしている部分もあったので、途中の式の書き方や大切さを繰り返し指導した。

↓

指導後に行われた久田中検定では途中の式も丁寧に書くことができ、同じ種類の問題で9問中8問正解だった。

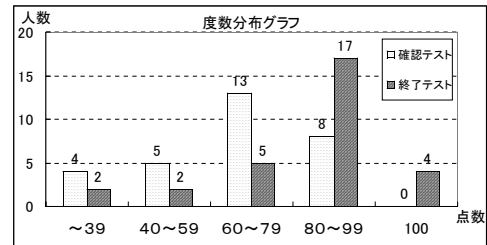
○短学活を利用した繰り返し学習について

1年生において、短学活の時間を有効に利用し、3分程度でできる正負の数の計算の反復練習を行った。つまずきのある生徒は個別指導し、全員ができるようになるまで取り組んだ。この取組により日頃の授業のなかでもその成果が表れはじめ、生徒は計算に対する抵抗がなくなり、早く正確に計算ができるようになった。

④ 生徒の習熟度や個に応じたきめ細かな指導のための教材の開発

数学科において、補充的な学習について考える際、遅れがちな生徒に対して、必要に応じて数学的技能の習熟にある程度の時間をかけることは大事なことである。しかし、提示する練習問題が単に問題の羅列では、十分な補充ができないと考えた。そこで、問題の配列を種類ごとに考慮し、生徒自身が自分の未定着な部分をしっかりと自覚でき、その部分を重点的に強化していくような教材を作成し、実践した。

- この学習を通して、最初はCの段階であった生徒をある程度Bの段階に引き上げることができた。定期テストでここで行った内容の問題の正答率は86%であった。
- ただ問題を解くのではなく、自分の定着していない部分を重点的に復習するので、効率のよい学習ができた。
- 生徒自身が自分がどの計算につまずいているのかを知ることができ、自己の課題を見つけることができた。また教師も個々の生徒がどこにつまずいているかを把握することができ、その部分に対して個別指導を行うことにより、定着が図られた。また学級全体の傾向としてもどの部分が特に未定着であるのかが確認でき、再度授業の中で全体に説明することができた。
- T・T指導を行うことにより、より多くの生徒に対応することができその効果が発揮できた。
- 生徒は定着が不十分なところを何とかしようと、大変意欲的に取り組んでいた。
- この教材を利用した学習の前に「確認テスト」、学習後に「終了テスト」を行ったところ右のような結果が得られた。



⑤ 基礎・基本の確実な定着を図る繰り返し学習の教材の開発

英語科において、毎時間行っている単語テストの際に、テスト終了後に単語練習もできる単語テストを作成した。毎回授業始めにテストをした後、数分間時間をとって練習をさせた。この単語テストは同じものを数回ずつ繰り返し行い、単語力の定着を図った。またテストの結果は一覧表に記録させ、自己の成果がわかるようにした。

⑥ 久田中検定

- 全学年を通して行うので、お互い刺激になり、練習問題に意欲的に取り組む生徒が見られた。
- 初めての取組であり、また合格という目標があるので、生徒は大変緊張感を持って、検定に臨んでいた。
- 数学においては習熟度の高い生徒は自主的に学習し、未履修内容を含む級を受検した生徒もいた。また、英語においても単語を先取りして覚えることができるので、これからの学習内容の定着が期待できる。
- 数学では合格できなかった生徒のうち16名の生徒が再チャレンジを希望し、再度受検した。
- 英語の単語練習や漢字練習を休み時間・昼休みに自主的に取り組む姿が見られるようになった。

2. 今後の課題

- 指導体制の工夫や個に応じた指導のための教材の開発など、さらに学力向上を図るための研究の推進と実践を行う。
- 久田中検定の取組について、よりよい方法を各教科において研究する。
- 習熟度が低い生徒の学習意欲の喚起と学力の向上をめざした具体的な手立てを行う。
- 学期末に行っている保護者の学校評価のアンケートにおいて、本研究の取組について十分周知されていないことがわかった。また本校の生徒の実態として、家庭学習の取組がまだまだ十分ではない。
これらのことを踏まえ、来年度はこれまでの研究をさらに推進していくとともに、生活実態調査や家庭学習に対する意識調査等を行い、その結果をもとに、広報活動等を活性化し、家庭との連携を図っていく必要がある。
- 習熟度別学習を行う際生徒のコース希望をとると、本人の力に即していないコースを希望する生徒がまだ見られる。そこで、自分の力を客観的に把握できるようにするための自己評価力の育成が必要である。

IV 学力把握のための学校としての取組

- 7月末にTK式標準学力検査を、1年生数学、2、3年生数学、英語で実施した。それぞれ前学年の学習内容に関するテストであった。全体の学力だけでなく、1つの教科の中でどの部分が落ち込んでいるのかというようなことも考察できた。また同じ検査を昨年度も行っており、生徒の変容を見ることができた。
- 1月20日に、長崎県の基礎学力調査を、2年生国語、数学、英語で実施した。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 中間発表会の実施
日時 平成15年11月13日（13:00～16:15）
場所 厳原町立久田中学校（本校）
目的 地域への研究の普及と今後の研究に向けての指導を仰ぐため
対象 対馬教育事務所管内小・中学校、各町教育委員会
- ホームページでの公開

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | | |
|----------------------|---|--|--|--|
| 【新規校・継続校】 | <input type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input checked="" type="checkbox"/> 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | <input type="checkbox"/> 3学級以下 | <input checked="" type="checkbox"/> 4～6学級 | | |
| | <input type="checkbox"/> 7～9学級 | <input type="checkbox"/> 10～12学級 | | |
| | <input type="checkbox"/> 13～15学級 | <input type="checkbox"/> 16学級以上 | | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T、Tによる指導 | | |
| | <input type="checkbox"/> その他 | | | |
| 【研究教科】 | <input checked="" type="checkbox"/> 国語 | <input type="checkbox"/> 社会 | <input checked="" type="checkbox"/> 数学 | <input checked="" type="checkbox"/> 理科 |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 外国語 | <input type="checkbox"/> 音楽 | <input type="checkbox"/> 美術 | <input type="checkbox"/> 技術・家庭 |
| | <input type="checkbox"/> 保健体育 | <input type="checkbox"/> その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | <input type="checkbox"/> 無 | | |